



巻頭言

姓名雑感



井上 勝 敬*

英語やその他の多くの欧語などではで姓 (family name) と名 (given name) を逆にして表現している。そこで、日本人名を英語などで表す(呼ぶ)場合には、その習慣に従って姓名を逆にすることが我国の「常識」となっている(たとえば、Hideo Nomoのように)。

一方、欧米人を日本語で呼ぶ場合には日本語の習慣に従わないで、彼らの母国語の習慣に従って「名姓」の順に呼ぶことになっている(たとえば、アルベルト・アインシュタインというように)。ところが、中国人や韓国・朝鮮人などは英語などでも、姓名の順にする場合が多い(たとえばDeng Xiao Pingのように)。新聞などのマスメディアや、オリンピックなどの国際競技の場合も、このような「慣習」に従っているようである。(学術論文などでは、当然、その論文を発行する学会等の執筆規定に従っている。)ヨーロッパの一部の国でも「姓名」の順に表現する場合もあるが、そのような国の人々は英語表記でも「姓名」の順にしている。日本人であってもそのオリヅナリティ故に、名声が欧米諸国にまで聞こえている場合には、例外的に「姓名」の順で呼ばれている(たとえば、Miyamoto Musashi(宮本武蔵)、Ihara Saikaku(井原西鶴)、Katsushika Hokusai(葛飾北斎)等々のように)。

このような現象は、明治以来、文化に関して欧米に対する日本の大幅な輸入超過の結果に外なるまい。しかし事情はそれ程変わらない中国人、韓国・朝鮮人などは前記のようにやや異なる状態である。これを日本人の精神構造の柔軟さ、寛大さ、また外部環境に対する対応の即応性に基づく、とする人もある。他の人は、自己の文化に対する自信の無さ、劣等感、欧米に対する追従性、迎合性にその原因を求めている。

* INOUE Katsunori
1936年6月5日生
1963年大阪大学大学院工学研究科(原子核工学専攻)修士課程修了
現在、大阪大学接合科学研究所、所長、工学博士、
高温・高エネルギー加工システム学
TEL 06-879-8640(所長室)
TEL 06-879-8648(研究室)
FAX 06-877-4449(所長室)
FAX 06-879-8689(事務室)
E-Mail inoue@jwri.osaka-u.ac.jp

一体、姓名は個体を識別するための単なる認識符なのだろうか。子供が産まれた場合、その両親はその子の名前をどうするか、真剣に考えるのが普通である。これは認識符以外の何らかの意義を求めて、名前に付随する諸々の効果を考慮してのことであろう。もしそうでなければ、一、二、三などの番号や、あ、い、う、え、お、などで済ましてしまえば良いはずである。このような姓名を外国語で表現するからと言う理由だけで、「名姓」に簡単にひっくり返してしまうことには、全く問題は無いのだろうか？

日本人の欧米語表記の歴史について詳らかではないが、江戸時代末期か明治初年か、或いは、日本人が南蛮人、紅毛人と接触し始めたもっと以前の時期に、彼らの習慣に従って安易にひっくり返したのが、おそらく、その始まりであろう。

この平成の世に「姓名」議論を一度くらいはする必要があるように思われる。

それにしても、漢字表記の外国人名やその他の固有名詞(たとえば中国人名や地名)に対しては「日本語読み」にしている(たとえば、江沢民一→コータクミンのように)。前記の「日本人の精神構造の柔軟さ、云々」が、アジア諸国に対しては怪しくなるのは何となくおかし。しかし、ここ10年くらいのことではあるが、韓国・朝鮮人名はカタカナ表記とし、原語に「近い」(カタカナでは、所詮は正確に表現できないだろう)呼び方をするようになった(たとえば、キムヨンサムのように)。これはかの地では日本人名をハングル文字表記でそのまま表すことの「対応」であろうか。ただし、この表記はいささか印象が薄くなり覚えにくいので、キムヨンサム(金泳三)などと漢字と併記する方が良いと思うが、どうだろうか？

強く主張したいこととして、日本人が日本語名を欧米人に紹介するとき、彼らの不完全な発音やアクセント(彼らのそれ自体は仕方のないことであるが)をわざわざ真似して、例えば inoUe などと変な発音をする行為には、絶対に同意できないことである。明治以来の「脱亜入欧」も良いが、このような過度の迎合性には彼らも不快であろうし、それでは「民族的幫間(タイコ持ち)」にすらもなれないだろうから。